

中山間地における冬春トマトの作型の検討

本岡 圭

(熊本県農業研究センター球磨農業研究所)

Kei Motooka :

Comparison of Cropping Season of Winter-spring Tomato in Mountainous Area

熊本県球磨地域では、近年抑制栽培を春先まで延長する作型(抑制延長栽培)が増えつつあるが、盆地特有の霧の発生、また寒暖の差が大きいことから、厳寒期の収量低下が問題となっている。

そこで、本地域に適した作型を明らかにするため、慣行の抑制延長栽培と、抑制栽培後に半促成栽培を組み合わせる植え替え栽培とでの収量・品質について比較検討を行うとともに、経営評価を行った。

1. 材料および方法

作型は、抑制延長栽培と、抑制栽培と半促成栽培を組み合わせた植え替え栽培での比較である。なお、抑制栽培と半促成栽培は異なるハウスで試験を行った。

供試品種は、抑制延長栽培には‘ハウス桃太郎’+‘がんばる根3号’、抑制栽培と半促成栽培には‘桃太郎ヨーク’+‘がんばる根’を用い、1区24株、2反復で試験を行った。栽植様式は、いずれの作型も畦幅2m、株間50cm(200株/a)で、定植日、収穫期間、誘引法はそれぞれ、抑制延長栽培が9月4日、10月中旬～5月下旬、ずり下ろし誘引、抑制栽培が9月4日、10月中旬～1月中旬、支柱誘引、半促成栽培が1月30日、4月上旬～6月上旬、支柱誘引であった。また施肥量(N:P₂O₅:K₂O)は、それぞれ3.4:4.4:2.9kg/a、1.9:2.9:1.7kg/a、1.4:2.4:1.3kg/aであった。

2. 結果および考察

1) 各作型の上記収穫期間における摘芯段数は、抑制延長栽培で18.8段、抑制栽培で7.7段、半促成栽培で6.4段となった。また、抑制延長栽培より抑制栽培および半促成栽培のほうが、1果重は重く、秀品率は高くなった(第1表)。

2) 規格外品は、抑制栽培および半促成栽培では生育後半樹勢の低下により空洞果の発生が多かったのに対し、抑制延長栽培では2S(114~132g)未満の小果の割合が年明け以降、特に厳寒期の2月頃に多かった(データ省略)。

3) 商品果収量は、抑制延長栽培では1月~3月にかけての収量が低く、12.7トンだったのに対し、植え替え栽培では前半の作型で9.4トン、後半で8.6トンとなり、合計すると18.0トンとなった(第1図)。

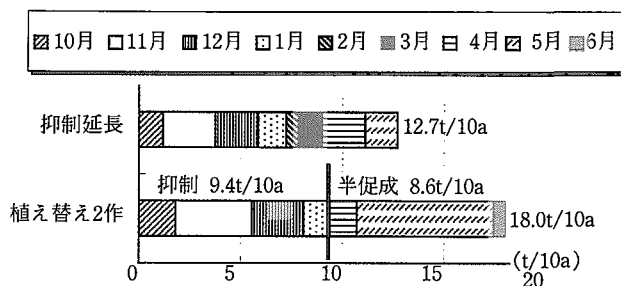
4) 商品果の階級別割合は、抑制延長栽培が2S~M(114~199g)で8割を占めたのに対し、抑制栽培および半促成栽培ではM~2L(167~332g)の階級でそれぞれ8割を占めた(データ省略)。

この結果、1999~2002年熊本県産トマト等階級別平均単価(第2図)を基に、作型ごとの10a当たり粗収益を試算すると、抑制延長栽培は430万円、一方の抑制栽培は370万円、半促成栽培は190万円となり合計すると560万円の粗収益となった(第1表)。

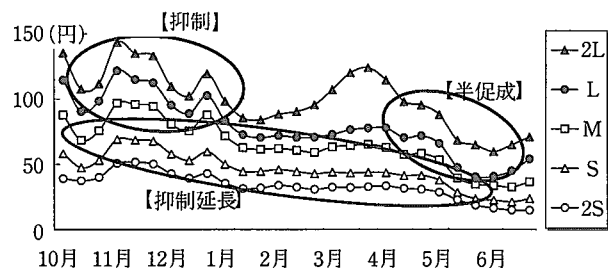
以上のことから、本地域のように、冬の間霧の発生が多く、寒暖の差が大きい中山間地では、抑制栽培と半促成栽培を組み合わせる作型のほうが収量・品質・粗収益とも優れることがわかった。

第1表 作型ごとの摘芯段数、果実品質および粗収益

作型	摘芯段数 (段)	商品果 1果重 (g)	秀品率 (個数比%)	粗収益 (万円/10a)
抑制延長	18.8	166	41	430
抑制	7.7	234	61	370
半促成	6.4	238	64	190



第1図 作型ごとの商品果収量



第2図 秀品果実1個当たりの旬別階級別平均単価

注) a) 1999~2002年熊本経済連青果物等階級別統計表より。
b) 2S: 114~132g S: 133~166g M: 167~199g L: 200~249g 2L: 250~332g。